台枠が新調された大行燈を取り囲む児童
＝砺波市神島の神嶋神社

夜高行燈

今年6月12日、例年にも増して威勢の良い「ヨイヤサー、ヨイヤサー」のかけ声が神島ふれあいセンターを出発し、出町中心街に向かった。夜高大行燈（あんどん）の台枠が37年ぶりに新調されたからである。継承してきた青年会や曳き回しの綱につながる子供たちの姿に、住民は「地域が勢いづいた」と喜んだ。

地域の元気づくり

神島にはもともと、田祭りの練り歩きはあったが、大行燈はなかった。1972（昭和47）年に、砺波市議に初当選したばかりの圓光寺住職・藤田誓壽さん（現在・瑞泉寺輪番）と当時の青年会長・遠藤英作さんの発案で、住民を元気にしようと大行燈製作が始まり、砺波夜高祭にまで繰り出すようになった。

台枠新調、威勢良く練る

昨年の「突き合わせ」で激しく損傷した台枠は修復が難しいため、ケヤキ材で新調された。昨年の裁許・満保貴之さん、今年裁許を務めた宮嶋秀治さんらは「急な話だったが、資金面も含めて地域のみなさんが理解してくれた」と感謝する。

下保賢昇青年会長によると、今年は台枠新調で、例年より1カ月早い3月中旬から神島ふれあいセンターに併設された多目的ホールの格納庫で製作を開始した。高さ5・5メートルの大行燈が楽々出入りできる入り口が付けられた専用の製作・収納庫である。下保青年会長は「今年も力いっぱい製作した。これからも神島の元気づくりに貢献していく」と話す。

大行燈が出入りできるよう作られた神島ふれあいセンター格納庫＝砺波市神島

わがまち再見

◎砺波市神島 ②